

論文要旨

情報技術の革新によって患者・市民が疾患体験を自ら発信する手段を得、闘病記と称される書籍やインターネット上のウェブログとして公表されている。それらが活用される中で、医療職者には患者の疾患体験を理解し、患者尊重を原則とする高い臨床能力が求められている。しかし、それらに資する効果的な現任教育方法については明らかになっていない。

目的：闘病記を素材にした現任教育プログラムにおける看護師の体験を明らかにする。

方法：質的記述的デザインとし、研究対象者は一総合病院において2009年および2012年に実施した研修会の参加者、および2008～2011年の参加者計約80～90人の中から、現在も在職中で研究同意の得られた看護師とした。グループもしくは個人インタビューにより研修会で闘病記を朗読し何を体験したのかについてデータ収集を行った。インタビューデータを逐語化し、看護師の体験の変化と意味に関するテーマを抽出し、体験の全体構造と各テーマの関係を分析しつつ、対象とする現象の全体の構造を統合した。

結果：対象となった看護師は10名で、研修会直後に8名、および研修会から年月を経た振り返りに3名（1名は両方に参加）であった。平均年齢38.0歳（26～54歳）、臨床経験は平均14.3年（5～32年）であった。看護師は、闘病記朗読によって〔闘病記に関心を向ける〕〔看護師として著者に対面する〕〔自分の看護体験を重ね合わせる〕〔初心に戻る〕〔患者の立場に身を置く〕〔感情が動かされる〕、ディスカッションによって〔同じ看護師でも見かたが多様であることに気づく〕〔患者・家族・医師など立場による考え方の違いに気づく〕〔辛さ、迷いを表出できる〕〔自分の経験を客観視できる〕〔診療科・病棟・年代をこえたグループで話せる良さを実感する〕〔病いや看護の普遍的なことを感じる〕〔患者尊重の重要性に気づく〕〔看護師としてのアイデンティティを支えるものを求める〕体験をし、そこには闘病記の〔音読の効果〕と〔参加への動機〕が関与していた。

結論：看護師は、著者の療養体験が綴られた闘病記を参加者と朗読することによって著者に看護師として対面し、自己の実践経験を振り返ることを通して患者尊重の必要性を認識していた。ディスカッションを通してこれらを参加者と共有することによって、多様なもの見かたや立場による考え方の違いを認識し、自己の職業アイデンティティの意識化をもたらしていた。これには病棟や年代をこえ、自主的参加で職場から離れた場の確保が有益であると考えられた。現任研修における闘病記朗読は実践経験の表出を引き出す素材として有用であり、本プログラムは看護の質の向上をもたらす可能性があることが示された。